

## 巻頭のことば

鈴木靖民

本書は書名の通り古代日本の対外交流史についての事典である。その内容は、弥生時代から平安時代までの古代日本の歩みを基軸に置いて、中国・朝鮮半島との絶え間なく続いた交流の歴史を取り上げる。歴史学に関連する諸分野で、日本をはじめ、中国・韓国の最前線で活動をくり広げている文献史学・考古学・文学の新進気鋭、中堅研究者三〇名が学界の研究成果のエッセンスを込めて執筆した事典である。

やや詳しくいうなら、Ⅰ弥生時代、Ⅱ古墳時代、Ⅲ飛鳥時代、Ⅳ律令国家の形成と展開、Ⅴ交易と交流の拡大の五部で全体を編成し、四〇の研究テーマを掲げている。さらに研究テーマごとに小項目のキーワードを設けて要領をえた解説を付している。

キーワードは研究内容を捉えるための手がかりとなる重要なことばを厳選し、複数の説明が結びついて理解を深めるケースもある。歴史を学ぼうとする初学者や研究の世界に関心を寄せる市民・大学生・大学院生や研究者・教員をはじめとして、それに大学図書館・公共図書館・博物館・資料館、発掘担当者などが簡便に使えるように、史料・遺跡・遺物を挙げるだけでなく、図版・写真・表（年表）・地図を多数用いて工夫をこらし、いわゆる事典の形式で説明している。

これらは幅広い読者を意識し、文章の典拠や歴史的背景にまで記述の及ぶところがある。なかには執筆者

よって重複や論旨の食い違いがあり、新説の示唆や開陳もまれにみられるが、あえて統一を図ることをしていない。さながらエッセイ・小論文の観を呈する箇所もあるのは二、三にとどまらず、本書の大きな特色である。

例示すると、土器・陶磁器・硯・文字・曆・錢貨・壁画・典籍などはモノであるが、仏教・法律・政治制度・官(冠)位・氏族・儀礼・外交使節・僧侶・渡来人・商人などのしくみ、学問・衣服・音楽はまだしも、国王・皇帝・王宮跡・石刻(金石文)などは想像がつくかもしれないが、学問・衣服・音楽はまだしも、国際構造や国際交易などに関しては、執筆者の書きぶりや考えが表れており、歴史的認識、本質の理解に触れることも少なくなく、単なる用語解説の枠では収まらない広がりがある。また日本史に加えて、東アジア史の視点、簡略な中国史・朝鮮史の性格を備えるともいえる。

こうして本書は、決して言語・文章などのことばや文字を説明する辞典・字典のたぐいではなく、事柄・物事の決まりや筋道をわかりやすく説き明かすことに徹するものである。

すでに言及した通り、本書は古代日本を基本にして対外関係史、対外交流史をめぐって中国史・朝鮮史の展開も視野に収めて説明されている。執筆者には中国・韓国の研究者も加わっている。初学者にとつてのガイド・入門書となるような研究史を重視した配慮もなされている。より大きくいえば、日本史の理解に対する今日の学界動向や内外の社会状況の反映でもある。

本書の論点は多岐にわたるが、どれも交流史の観点という共通性を有しており、国家による外交を主としながらも、多くの複雑な様相を明らかにしてきたことを多角的に提示しているといつてよいであろう。したがってその性格は、いわば個別のテーマを介して、古代日本対外交流史の全体像を取り扱っている。やや踏み込んでいえば、日本史そのものに迫り、またはその大切な一翼を担っているというべきであろう。

私が古代史・中国史・朝鮮史の研究会に参加し、研究論文を発表するようになって半世紀以上経つが、この古代日本の対外関係・交流史の分野の発生や展開の現場に多く立ち会ってきたかもしれないと、数年前、

交流史入門の執筆と編集に携わった頃より、少しおこがましいが自覚している。

本書が名乗る交流史という称呼も、まだ学界内外の市民権が十分えられたとはいえないかと思われる（最近村井章介・荒野泰典編『新体系日本史5 対外交流史』山川出版社、が刊行された。序で書名の「対外交流史」についての言及がある）。少なくとも半世紀ほど前には、この分野は国家同士の外交史がほとんど主流であり、史書や史料に中国・朝鮮の關係、遺跡・遺物など考古学の資料が加わることがなく、研究者の人口を含めて今日みられるような活況では到底なかった。

しかし本書での交流史の概念・解釈に関してみるなら、例えば文字（漢字）文化、倭わの五王ごおうなどへの追究は文化交流や対外關係の領域を超える事実が細かく論じられ、すでに王権・国家の本質と密接不可分のつながりがあることが明白になっている。求法くぼうと巡礼じゆんれいの異同は後者が国家（国内）への導入・還元の側面が希薄であるとの指摘は重要である。ユーラシア大陸各地とのさまざまな交流の回路が仏教にまとめられていく様相についても、同様にみなされる。

あらためて喋々するまでもないが、日本周辺の北方史・南島史をくり入れてするのも特徴的である。くり返しになるが、本書の多くの対象は何より中国・朝鮮その他の東アジア・東ユーラシアとのつながり、または東アジアのなかで生じる対外關係・交流史なのである。古代の日本僧の著作になる『入唐求法巡礼行記』にっとうくぼうじゆんれいこうき『參天台五臺山記』さんてんたいごだいせんぎは、中国・韓国でも各種出版され、調査・研究も進んでいる。

交流の語や概念に関しては、東アジア・北アジアの移動、連動とどうかかわるのか、外交使節や商人が公的かどうか、すなわち国家が主導する移動か否かによって公私・官民の違いや変化が生じるという議論がみられる。私は三〇数年前の著書のなかで、交流が生産様式と置き換え可能な語であるとする古典的な学説に触れたが、今日も交流・交換の語や概念は研究の流動性がまだあり、固まったとはいえない状況なのかもしれない。本書にも交流の多元的な性格がうかがわれるのである。

最近注目されるのは、私も少々引用したことがあるが、柄谷行人氏の考え（『帝国の構造』青土社、『世界史の構造』

岩波書店)であり、海外にも影響を与えていると報じられた。後者の著書で、交換様式には①互酬、②再分配、③商品交換、④無償分与(知識の交換など)の四つのパターンがあると提言している。私には国家の形成史に関連して、文化人類学ないし経済人類学に関心を寄せてきたこともあり、馴染みの用語・概念なので親近感を覚える事柄であるが、なかでも④が多くの価値を生み出すとされる。これを古代の日本史の内実にどのように対応させるか、また適応が可能であるかという点が研究、議論の活性化を促す大きなポイントである。

本書を通して、読者は多様な形で明らかにされた史実に向き合って、さまざまな捉え方や解決方法を模索し、深める途が拓かれるに違いない。臉に浮かぶ過去の光景のなかに、すでに消え去ったかのような人々とその生活、彼ら、彼女らがいろいろに紡いできた多彩な歴史を思索し、復元へと近づきうると思われる。最先端の研究に接して獲得したものから興味や面白さを見つけ出し、さらに真の事実に対して状況を捉え、所与の問題を共有して頂ければ幸いである。それぞれが独自の課題を設けて論を立て、新たな対象の追究を可能にする。体系化のために議論すべき具体的な問題はいくつも残されているのである。

本書に接して、研究の到達点を確かめ、新たな対象を探索する多くの方々が見れることを期待してやまな  
い。

# 目次

巻頭のことば……………鈴木靖民 i

I 弥生時代……………1

1 稲作農耕と東アジア……………端野晋平 3

水稲耕作の起源 水稲耕作開始前夜の対外交流 水稲耕作伝播とその背景

**キーワード** 水稲耕作 弥生土器 無文土器 支石墓 木棺墓 甕棺墓 墳丘墓  
板付遺跡 菜畑遺跡 松菊里文化 大陸系磨製石器 木製農具  
AMS年代 青銅器 鉄器 環濠集落 吉野ヶ里遺跡 弥生人

【図】 1. 佐賀県唐津市 菜畑遺跡出土遺物 2. 福岡県北九州市 長行遺跡出土孔列土器

3. 福岡県北九州市 貫川遺跡出土石庖丁 4. 福岡県糸島市 新町遺跡9号墓  
5. 福岡県粕屋町 江辻遺跡1地点1号住居跡 6. 福岡県福津市 今川遺跡出土青銅器・管玉

2 三韓・楽浪郡との交流……………高久健二 16

楽浪郡の設置と変遷 三韓の成長と楽浪郡との交流 倭と楽浪郡・三韓との交流

**キーワード**

馬韓 辰韓 弁韓(弁辰) 奴国 伊都国 勒島遺跡 茶戸里遺跡  
原の辻遺跡 「漢委奴國王」蛇鈕金印 楽浪系土器 三韓系土器 石硯

【図】 楽浪郡・三韓・倭の交流

3 邪馬台国と東アジア……………河内春人 28

卑弥呼の登場 魏の東アジア政策 卑弥呼と魏の外交 邪馬台国の行方

**キーワード**

三国時代 「魏志」倭人伝 倭国の乱 帯方郡 邪馬台国所在地論争  
公孫氏 纏向遺跡 邪馬台国連合

【図】 1. 母丘儉紀功碑 2. 「魏志」倭人伝の2つの解釈

II 古墳時代……………39

4 日本史と世界史をめぐる議論……………田中史生 41

戦後歴史学と「東アジア」 東アジア世界論と国際的契機論をめぐる議論 新たな広域史の模索

**キーワード**

冊封体制 東アジア世界論 東夷の小帝国 国際的契機論 中華思想

【図】「梁職貢図」北宋模本 倭国使

5 倭の五王の国際関係…………… 廣瀬憲雄 49

四世紀後半の倭国と朝鮮半島 倭国と中国王朝との関係 倭王の称号と武の上表文

キーワード 七支刀 加耶 百濟 高句麗 広開土王碑 新羅 『宋書』倭国伝

倭の五王 宋 沖ノ島 竹幕洞祭祀遺跡

6 倭国の渡来系文物…………… 小林孝秀 56

倭国の渡来文化と渡来系文物 渡来系文物と渡来人研究の視点

渡来系文物からみた渡来人の技術・墓制 渡来系文物が語る対外交渉

キーワード 須恵器 カマド 横穴式石室

【図】 1. 葦屋北遺跡の馬埋葬土坑 2. 剣崎長瀬西遺跡群の古墳群全景 3. 金製垂飾付耳飾

7 渡来人と渡来系氏族…………… 中野高行 62

帰化人と渡来人 前期の渡来人・渡来系氏族 後期の渡来人・渡来系氏族

朝鮮三国の国名を冠した郡

キーワード 王仁(西文) 弓月君(秦氏) 阿知使主(漢氏) 東漢氏(倭漢氏) 王辰爾

今来漢人 百濟郡 百濟王善光 高麗郡 高麗若光 高麗福信 新羅郡

午王山遺跡

8 倭国の文字文化……………田中史生 70

漢字文化との接触 中国系人士層の活躍 刀剣銘文の文字世界 定着する漢字文化

キーワード

稻荷台一号墳出土「王賜」銘鉄剣 稻荷山古墳出土金錯銘鉄剣

江田船山古墳出土銀象嵌銘大刀 隅田八幡神社人物画像鏡

元岡G一六号墳出土庚寅銘大刀 五経博士 観勒 曆法

【表】倭王武・百済王慶の上表文に用いられた中国史書・経書の類同語句数

9 世襲王権の成立と国際関係……………河内春人 78

倭の五王以後 継体朝の国際関係 加耶の衰退 ヤマト政権の確立

キーワード

筑紫磐井と岩戸山古墳 倭系百済官人 倭系前方後円墳 百済 新羅

「任那の調」

III 飛鳥時代……………87

10 仏教伝来……………河上麻由子 89

渡来人と仏教 仏教公伝 国家による公伝 国家による受容

再び、倭国の仏教公伝 百済の仏教 梁の仏教を受容すること

キーワード 司馬達等 聖明王 蘇我稻目・馬子 飛鳥寺と王興寺 弥勒寺  
皇龍寺 百濟大寺 慧慈

11 日本と朝鮮の石刻史料 …………… 橋本 繁 98

石碑文化の広がり 東国の石碑と中国・朝鮮の影響 墓碑・墓誌  
キーワード 日本の石刻史料 高句麗の石刻史料 百濟の石刻史料  
新羅の石刻史料 渤海の石刻史料

【表】 古代日本の石碑・石塔 【図】 古代日本の石碑・石塔の所在地

12 東アジアの木簡 …………… 三上喜孝 105

簡牘と木簡 書写材料の選択的利用 文書様式の受容と伝播——前白木簡を中心に——

13 飛鳥宮跡とその周辺 …………… 林部 均 110

飛鳥宮跡 飛鳥宮前史 飛鳥宮の造営 飛鳥宮跡の発掘調査  
飛鳥宮跡の歴史的意義 飛鳥宮跡とその周辺  
キーワード 石舞台古墳 飛鳥の石造物 酒船石遺跡 飛鳥池遺跡 飛鳥京跡苑池  
飛鳥水落遺跡 富本銭 野口王臺古墳

【表】 飛鳥の諸宮の移り変わり

【図】 1. 飛鳥・藤原地域の遺跡分布図 2. 飛鳥宮跡の発掘調査とⅢ期遺構  
3. 飛鳥宮跡Ⅰ期遺構・Ⅱ期遺構 4. 飛鳥宮跡ⅢⅠA期遺構とその周辺

14 壁画古墳（裝飾古墳）……………小林孝秀 122

壁画古墳と裝飾古墳 裝飾古墳にみる大陸系要素 飛鳥の壁画古墳

キーワード

王塚古墳（桂川／壽命王塚古墳） 五郎山古墳 珍敷塚古墳 竹原古墳 高松塚古墳  
 キトラ古墳 魏晉南北朝の壁画墓 唐の壁画墓 高句麗の壁画古墳 百濟の壁画古墳

【図】

1. 竹原古墳の石室奥壁に描かれた壁画
2. 高松塚古墳の壁画 女子群像
3. キトラ古墳の壁画 十二支像（寅）
4. 北齊湾漳墓の墓道東壁壁画（北部分）
5. 唐新城公主墓の墓室東壁壁画

IV 律令国家の形成と展開……………131

15 隋唐帝国の成立と国際関係……………荊木美行 133

隋の中国統一と周辺諸国 隋と高句麗の衝突 唐の建国と東アジア 朝鮮半島諸国と唐

キーワード

隋 日本（国号） 天皇 唐 義慈王 金春秋（武烈王） 泉蓋蘇文  
 毗曇の乱 乙巳の変 金庾信

16 隋との外交……………河上麻由子 143

六世紀後半の中国 隋の対外政策 高句麗出兵 第一回遣隋使 舍利塔建立

第二回遣隋使 倭国と隋との交渉

キーワード

文帝 煬帝 小野妹子 裴世清 聖德太子（厩戸皇子）

17 百濟滅亡…………… 中野 高行 150

齊明朝の国際関係 白村江の戦い 百濟滅亡後の国際関係

キーワード

齊明天皇 鬼室福信 豊璋 中大兄皇子（天智天皇） 朝鮮式山城 防人  
水城 大野城 基肆城 金田城 鞠智城 鬼ノ城 郭務悞 耽羅  
百濟王昌成 余自信（余自進） 鬼室集斯 憶礼福留 百濟三書

18 唐との外交…………… 榎本 淳一 159

唐代の国際秩序 日本の対唐外交のダブルスタンダード 通交関係の推移 対唐外交の意義

キーワード

遣唐使（入唐使） 唐の交通路 明州 揚州 越州 長安 洛陽  
伊吉博徳書 高表仁 玄宗 安史の乱 戒融 沈惟岳 孫興進  
高鶴林 黄巢の乱 遣唐使の停止 菅原道真

【表】遣唐使一覧 【図】遣唐使の航路

19 隋唐で学んだ人…………… 森 公章 174

遣隋使・遣唐使の構成員 留学生の選定と人数 文物の将来と留学生の動向

留学生の特色と変遷 使節員・随員たちの学び

キーワード

留学生 学問僧 薬師恵日 高向玄理 旻 南淵請安 阿倍仲麻呂 吉備真備

道昭 道慈 大安寺 玄昉 最澄 空海 五臺山 天台山 永忠 靈仙  
 円仁 入唐求法巡礼行記 惠運 宗叡 常晓 真如親王 円行 入唐五家伝  
 惠萼 円載 円珍 伊勢興房 真済 中瑾

20 来日僧・唐人 …………… 河野保博 194

来日する僧侶・唐人 八世紀の外国僧と日本仏教の展開 八世紀の唐人の来日と役割  
 九世紀の来日唐僧・唐人と唐商人

**キーワード** 道璿 菩提傳那 仏哲 袁晋卿 皇甫東朝 鑑真 思託 法進  
 惠雲 唐招提寺 義空 湛誉

【図】西大寺旧境内出土 坏片 「皇甫東□」記銘墨書

21 唐宋石刻史料にみる「日本」…………… 葛 継勇／※澤本光弘 207

四つの墓誌の発見 石碑

**キーワード** 井真成墓誌 李訓墓誌※ 杜嗣先墓誌 祢軍墓誌 吳懷実墓誌  
 法王寺釈迦舍利藏誌(円仁石刻)※

22 新羅との外交…………… 浜田久美子／※鄭 淳一 214

新羅の統一 日羅外交の時期区分 モノの往来 新羅海賊  
**キーワード** 新羅 文武王 神文王 聖徳王 景德王 惠恭王 新羅使 新羅学語※  
 新羅訳語※ 遣新羅使 金順貞 金泰廉 金崑 新羅征討計画 紀三津※  
 菁州(康州)※

【表】 1. 新羅使一覧（高句麗滅亡以降） 2. 遣新羅使一覧（高句麗滅亡以降）

23 渤海との外交…………… 浜田久美子 229

日本史料にみる渤海 渤海使の来日 モノ・人・情報の交流

キーワード 渤海 大伴犬養 大野田守 高元度 首領 高内弓（内雄） 宣命曆（長慶宣明曆）  
大祚栄 大武芸 大欽茂 大諲譎 渤海使 遣渤海使

【図】 1. 渤海国中台省牒 2. 渤海使の航路 【表】 1. 渤海使一覧 2. 遣渤海使・送渤海使一覧

24 北方史…………… 蓑島栄紀 240

続縄文文化と倭国 七世紀の転換 八〜九世紀の北方史 古代北方史のゆくえ

キーワード 続縄文文化 オホーツク文化 擦文文化 肅慎 靺鞨 契丹  
秋田城 奥州平泉

25 南方との交流…………… 田中史生 247

倭国と「ヤク」 「南島」との朝貢関係 南島交易と大宰府 奄美島人襲来事件とその後

キーワード 流求国 掖玖（夜久） 多禰（多嶽） 奄美 ヤコウガイ 螺鈿  
カムイヤキ 滑石製石鍋 城久遺跡群

【図】 平安期の列島南方

26 東アジアの官(冠)位制……………鄭 東俊 256

古代日本の官(冠)位制 唐の官位制(官品制)との比較 朝鮮三国・渤海の官位制との比較

【キーワード】 位階 冠位(冠位制) 冠位十二階の制 骨品制

- 【表】 1. 冠位・位階制の変遷 2. 唐の官品制と日本の官位制 3. 百濟・新羅の官位制  
4. 新羅の骨品制と官位制との関係

27 東アジアの律令制……………稲田奈津子／※西本哲也 261

日本における律令制の成立 中国律令と日唐比較研究 朝鮮の律令と日本 格式の編纂

- 【キーワード】 近江令※ 飛鳥浄御原令※ 大宝律令※ 養老律令※ 令義解※ 令集解※  
泰始律令※ 永徽律令※ 唐律疏議※ 『訳註日本律令』※ 『唐令拾遺』『唐令拾遺補』※  
天聖令※ 吉備真備※ 三国史記 骨品制 三代の格式※ 類聚三代格※ 延喜式※

- 【表】 1. 日本律令の編纂 2. 養老律令の構成

28 東アジアの都城制……………林部 均 274

条坊制都城 古代の王都 条坊制都城の成立―藤原京の造営― 藤原京から平城京へ

- 【キーワード】 難波宮跡 恭仁宮跡 紫香楽宮跡 長岡京跡 平安京跡 渤海の都城  
隋・唐の都城 朝鮮半島(新羅)の都城

- 【図】 1. 古代の王宮・王都の分布 2. 藤原京(十条十坊説) 3. 藤原京と平城京の条坊道路の規格  
4. 藤原京の条坊制 5. 平城京

29 東アジアの衣服制……………永島朋子 286

衣服の制度—衣服の機能— 官位制と冠 衣服令—装いと色彩— 服装の構成—衣と冠と帯と裳—  
 着用の場と庶民・奴婢の服 東アジア世界と衣冠、そしてそれ以外

キーワード 袴 裳

【図】 1. 礼服御冠残欠 2. 墨絵彈弓 3. 鳥毛立女屏風 第1扇 4. 紺玉帯残欠

5. 通天牙笏 6. 布袴第8号 7. 錦紫綾紅腸纈緋間縫裳残欠

30 外交儀礼・外交文書……………浜田久美子 293

礼と外交 礼制の受容 古代日本の外交儀礼 迎接体制の整備 外交文書からわかること

キーワード 五礼 唐礼 争長事件 大伴古麻呂 吳懷実 客館 難波館

平城京の客館 平安京の客館 能登客院 松原客館 書儀

31 外来楽の伝来と楽制……………豊永聡美 302

外来楽の伝来 日本の楽制

キーワード 林邑楽 渤海楽

【表】 雅楽寮の構成 【図】 日本の雅楽の源流

32 大宰府……………廣瀬憲雄 308

大宰府の成立 大宰府の外交機能 大宰府と交易

キーワード

大宰府 筑紫大宰 鴻臚館（大宰府鴻臚館） 大宰府客館 交易管理  
官司先買 渡海制 年紀制

【図】 大宰府周辺の航空写真

33 正倉院……………飯田剛彦 314

正倉院宝物の「国際性」 宝物中の舶載品 国産品への影響

キーワード

正倉院文書 正倉院宝物 買新羅物解 鳥毛立女屏風  
新羅村落文書（新羅国官文書） 佐波理加盤付属文書

【図】 1. 買新羅物解 2. 新羅村落文書 3. 佐波理加盤付属文書表

34 新羅仏教の影響……………浜田久美子 323

新羅仏教の興隆 留学僧の派遣 審詳と盧舍那仏造立―新羅華嚴の影響―

新羅王子金泰廉の来日と大安寺 淡海三船と薛仲業の交流 九世紀入唐僧と新羅仏教

キーワード

元暁 義湘 見登 理願 審詳

35 奈良・平安時代の渡来土器……………重見 泰 329

渡来土器の資料的性格 搬入時期の推定 奈良・平安時代の搬入土器・陶磁器

キーワード

唐三彩 渤海三彩 新羅土器（統一新羅） イスラム陶器

36 漢籍の受容と交流 ..... 河野貴美子 336

漢籍の知を基盤とする律令国家形成 『懷風藻』と勅撰三漢詩文集

『白氏文集』の伝来とその影響 日本における漢籍受容の特徴と多様性

キーワード

文選 懷風藻 長屋王 凌雲集 文華秀麗集 嵯峨天皇 経国集

文章経国思想 白氏文集 高野雜筆集 小野篁 都良香 島田忠臣

菅原道真 菅家文章 千載佳句 崔致遠 日本国見在書目録

V 交易と交流の拡大 ..... 349

37 海商と国際交易 ..... 皆川雅樹 351

海商の出現 中国海商の交易活動 平清盛と日宋貿易

キーワード

張宝高(張保皋、弓禰) 文室宮田麻呂 唐物 平清盛 宋銭 神崎荘

38 唐滅亡後の国際関係と日本 ..... 河内春人 359

唐の滅亡と東アジアの分裂 平安日本をめぐる国際情勢と外交

日宋貿易と契丹・高麗 中世的国際関係へ

キーワード

後百済 高麗 吳越国 契丹・遼 渤海滅亡と日本 市船司 刀伊襲来

【図】 1. 五代十国初期の中国 2. 阿育王塔

39 撰関期の仏教交流……………手島崇裕 371

齋然の入宋—日宋仏教交流の特徴— 中国江南地域との仏教交流 成尋の入宋—聖地巡礼と往生—

キーワード 齋然 清涼寺釈迦如来像 宋版大蔵経 寂照 成尋 参天台五臺山記 五臺山

40 国風文化……………皆川雅樹 379

「国風文化」のあいまいさ 「国風文化」という言葉

キーワード かな文字 やまと絵 時絵

あとがき……………浜田久美子 385

執筆者紹介…………… 389

付録…………… 1

地図……………河野保博 澤本光弘 2

索引

人名(氏族名)……………	32	事項……………	47	史料名……………	63
1 前漢(前一世紀～一世紀)		2 後漢(紀元前後)			
3 魏・呉・蜀(三世紀)		4 西晋(四世紀初)			
5 東晋・五胡十六国(四世紀前半～五世紀初)		付「五胡十六国時代の主な国家・政権」			
6 北魏・宋(五世紀前半)		7 北魏・宋(五世紀中葉)		付「南北朝時代の主な国家・政権」	
8 北魏・梁(六世紀初)		9 東魏・西魏・梁(六世紀中葉)			
10 隋(六世紀末～七世紀)		11 唐(七世紀)		付「唐の統一時の領域・最大領域」	
12 唐(八世紀)		13 唐(九世紀)			
14 五代十国(一〇世紀)		15 五代十国(一〇世紀)		付「五代十国時代の主な国家・政権」	
16 北宋・遼「契丹」(一二世紀)		17 日本列島北部(六世紀～一二世紀)			
18 日本列島南部(六世紀～一二世紀)		19 朝鮮半島① 青銅器時代～初期鉄器時代			
20 朝鮮半島② 紀元前一世紀～紀元三世紀		21 朝鮮半島・日本列島① 三世紀中葉～六世紀前半			
22 朝鮮半島・日本列島② 六世紀中葉～七世紀		23 朝鮮半島・日本列島③ 八世紀～一〇世紀			
24 渡海僧の行跡(1) 唐代(八世紀～九世紀)		25 渡海僧の行跡(2) 五代～宋代(一〇世紀～一二世紀)			
26 天台山 付「渡海僧関連諸寺院」		27 五臺山 付「渡海僧関連諸寺院」			

## 凡 例

一、本書は、弥生時代から平安時代までを中心に、古代日本と周辺の諸国・諸地域との交流について、四〇の項目（テーマ）に分けて解説した事典である。

一、各項目は、Ⅰ弥生時代、Ⅱ古墳時代、Ⅲ飛鳥時代、Ⅳ律令国家の形成と展開、Ⅴ交易と交流の拡大の五つの時代に分けて配列した。

一、各項目は、歴史的背景や研究史などを述べる「テーマ解説」と、用語を説明する「キーワード」で構成される。冒頭の目次から、関心のある項目・キーワードを見つけて「読む事典」としても、巻末の索引で掲載ページを調べる一般的な事典としても活用できる。

一、関連度の高い項目には、文中に「↓8 倭国の文字文化」のように項目番号（1～40）と項目名を入れて、参照できるようにした。

一、キーワードは、全国歴史教育研究協議会編『日本史用語集 A・B共用』改訂版（山川出版社、二〇一八年）に掲載されている語や、研究の深化が著しい語を中心に三六七語を立項した。

一、キーワードとして立項されている語には、以下の原則で「\*」を付した。

- ① 同一項目内にあるキーワードには、「\*」を付した。
- ② 異なる項目にあるキーワードには、「\*」の右下に項目番号（1～40）を付した。
- ③ キーワードの文中に、同一項目にある別のキーワードが出てきた場合は、「\*」を省略した。
- ④ キーワードのうち、以下の国名は頻出するため、同一項目内にある場合を除き、「\*」を省略した。  
百濟・高句麗・新羅・隋・唐・宋・渤海・高麗

⑤ 複数の項目で立項されているキーワードは、「\*」に初出の項目番号を付した。

一、参考文献は、「テーマ解説」と「キーワード」それぞれの末尾に付した。個々のキーワードで参考文献を挙げる場合や、複数のキーワードに共通する参考文献を挙げる場合は、「主」で区切った。

一、「テーマ解説」「キーワード」とも執筆者名を項目末尾に記した。多様な解釈の可能性を示すため、ひとつの学説に統一することはせず、各執筆者の見解を尊重した。